

和歌山県那賀郡岩出町
岩出町運動広場発掘調査概報

昭和57年2月
社団法人 和歌山県文化財研究会

調査の組織

調査委員会

調査委員	馬鹿 正信	(和歌山県文化財保護審議会委員)
	翼 三郎	()
	都出 比呂志	()
	藤澤 一夫	()

事務局

局長	海野 正幸	
幹事	桃野 真晃	(県文化財課第二係係長)
書記	宮本 登志夫	(県文化財課主事)

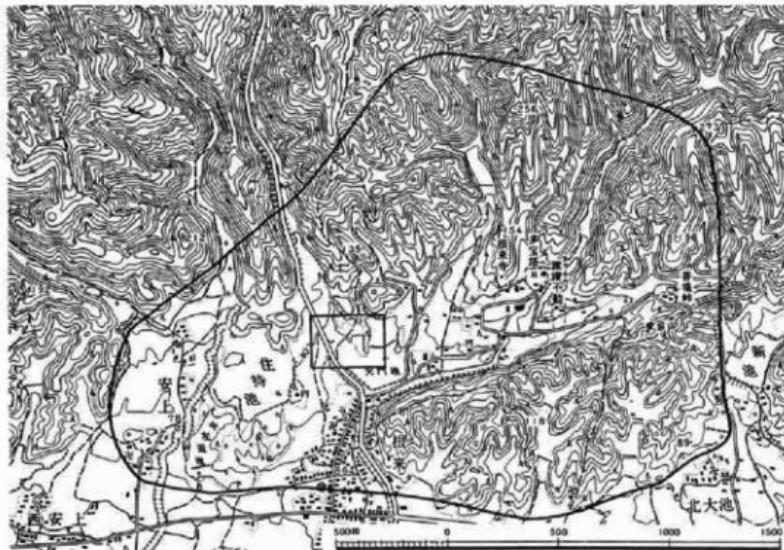
調査員 上田 秀夫 (県文化財課技師)

例 言

1. 本書は岩出町運動広場建設工事に伴う試掘調査の概報である。
2. 調査費は岩出町がこれを負担した。
3. 発掘調査は社団法人和歌山県文化財研究会に委託して行なわれた。
4. 調査は上田が担当し、仏教大学々生大岡康之が補佐した。
5. 造構の実測・製図及び本書の作製は大岡が当った。

調　　査

根来寺は那賀郡岩出町根来に所在する新義真言宗の寺院である。同寺は興教大師空海をその開基とし、中世に入って次第に寺領を増やし勢力を伸ばしていく。特に室町時代末期に至っては、多数の僧兵集団を擁する城塞化した寺院としての形態をみせる。そうして天正13年（1585）の豊臣秀吉による根来攻めで一部の堂宇を残して全山灰燼に帰すまでの間、嘗々たる繁栄を築いていくのである。この天正の兵火は発掘調査においても焼土層として広範囲で確認され、年代判定の重要な資料となるものであった。本遺跡の調査は、大規模農道建設を機に昭和51年度から4年間に渡って行なわれた発掘調査がその最初のものであり、この調査によって遺構の残存状態がきわめて良好であることが判明し、学問的に非常に重要な遺跡であることが確認された。遺跡の範囲は第1図に示すように大門池以東の根来寺旧境内と思われる地域の根来寺坊院跡と、大門池以西の根来寺に伴う町屋地域であると考えられる西部地区遺跡を含めた地域一帯で、東西2.8km、南北2kmの広大な範囲に及ぶものと思われる。今回の調査は大門池の北側の緩斜面に岩出町運動広場が建設されることになり、その事前調査として実施したものである。この付近はすでに後世の削平を受けている可能性があり、遺構がどの程度残されているか問題があった。ところが、この調査の結果江戸時代の遺構を検出し、さらに部分的には室町時代の遺構をも検出することができた。



第1図 遺跡の範囲

遺構・遺物

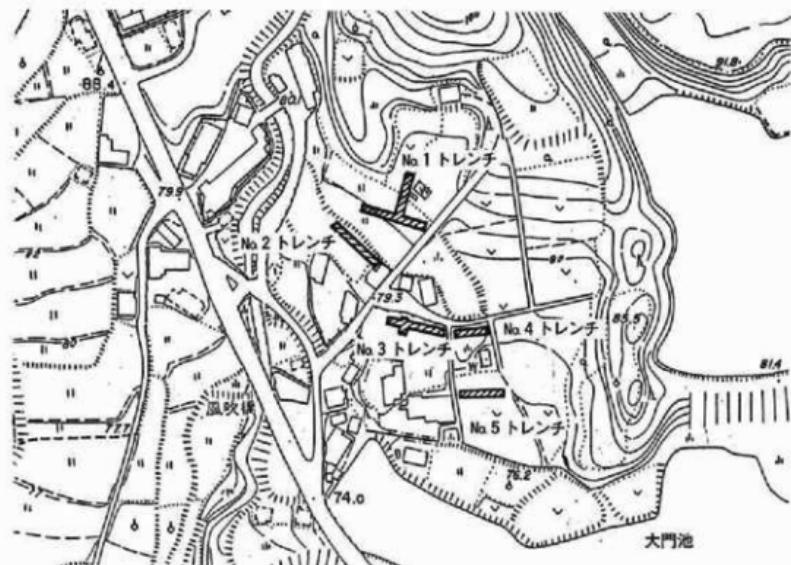
調査は遺構の残存状態を確認するために建設予定地にトレンチを設定して実施した。調査区の設定は第2図に示すとおりである。以下各トレンチごとにみていくことにする。(第3図)

No.1 トレンチ (図版1)

最北部に設定した「T」字形のトレンチである。中央部で江戸時代のものと思われる直径約1mの埋桶を検出した。桶の底板が大部分残存しており、瓦片が多く出土した。また石垣を北部と西部の二箇所で確認した。これらの石垣の裾には溝が設けられ、溝からは瓦片が出土した。現地形からみて、これらの石垣は最近まで作用していたものと思われる。北部、東部では表土直下で岩盤が出ており、遺構のほとんどが岩盤を切り込んで作られている。

No.2 トレンチ (図版1)

東部で甕を肩まで埋没させた埋甕を検出した。丹波焼の甕を用いたもので江戸時代の遺構と思われる。甕の肩部以上は失なわれていた。SD 201は両側に石組をもつ溝で、北東部は削平のため消滅している。江戸時代中期以降のものと思われる焰烙が出土した。SD 202は素掘りの溝である。SD 203は両側に石組を有していたものと思われるが、水道管理設と削平により一部が残るにすぎない。この二つの溝は瓦片が出土しており、江戸時代中期以降のものと思われる。またSK 204からは国産磁器の伊万里焼、SD 206からは江戸時代のものと思われる土師質小皿、瓦片が出土して



第2図 調査区の設定

いる。SD 201に接して東側で直径30cmの埋桶を検出した。側板と籠の一部が残り、拳大の石数個が投入されていた。このトレンチでは後世の削平・擾乱等がみられるが、江戸時代の造構が比較的よく残っていた。しかし室町時代に遡る造構は認められなかった。

No.3 トレンチ (図版2)

SD 301から東側で天正の兵火のものと思われる焼土層を確認した。わずかであるがこの地点においても天正の焼土層が存在することが確認できた。SD 301は20~30cm大の石が投入されていた溝で、室町時代のものと思われる土師質の火舎が出土した。この溝と並んで西側では一石五輪塔、五輪塔の水輪・地輪部ほかの石製品を含む大小の石が無造作に放り込まれた土壌SK 301を検出した。ここからは中国製青磁・染付をはじめ、国産では室町時代のものと思われる美濃灰釉椀、瓦質椀、土師質皿、土釜等の遺物が出土している。トレンチ中ほどで部分的にはあるが土壌SD 302を検出した。遺物は室町時代のものと思われる瓦質摺鉢、土師質皿等の出土があった。その西では近接してSF 301・302の二つの溜枡を検出した。両者ともまわりに1段の石組が長方形に廻っており、中国製染付、室町時代のものと思われる土師質皿、土釜等の出土遺物があった。SD 302は素掘りの溝で、中国製染付、室町時代の瓦質・土師質土器等の出土遺物があったが、江戸時代のものと思われる土師質土器・瓦片が含まれており江戸時代以降の造構であろう。このトレンチでは室町時代のものと考えられる造構が比較的良好な状態で残されており、天正の焼土層とともに室町時代の造構も残存していることが確認できた。

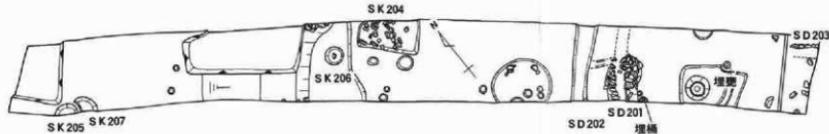
No.4 トレンチ

No.3 トレンチに道を介して東側に設定したトレンチである。No.3 トレンチ同様室町時代の造構の存在が期待されたが、表土直下に岩盤が存在し、東端で東へ落ちる段と溝状の造構を確認したのみであった。遺物の出土もなかった。

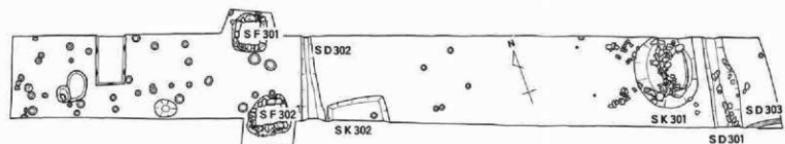
No.5 トレンチ

最も南に設定したトレンチである。西から東へ向かって緩やかな斜面を形成している。ここでは直径約1.2mの埋桶を二箇所で確認した。SK 501は桶の底板が、SK 502は桶の籠が残存していた。いずれも江戸時代のものと思われる瓦片が出土している。また今回の調査で唯一の石組井戸をトレンチ東部で検出した。これは表土直下から切り込んだ造構で、瓦片が出土している。江戸時代以降のものであろう。

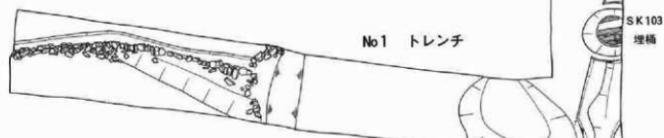
今回の調査ではNo.1、No.2、No.5 トレンチにおいて江戸時代の造構が、No.3 トレンチでは室町・江戸時代の造構がそれぞれ認められ、室町・江戸時代の遺物が出土した。この運動広場の建設が予定されている用地内においても、造構・遺物が相当残されていることがこの調査によって確認することができた。



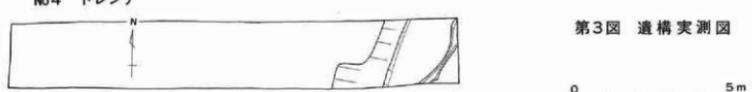
No.2 トレンチ



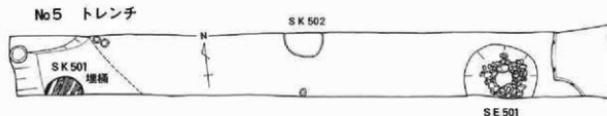
No.3 トレンチ



No.4 トレンチ



第3図 造構実測図





No. 1 トレンチ 北より



No. 2 トレンチ 東より



東より No. 3 トレンチ 西より



No. 5 トレンチ 東より

昭和57年2月28日

岩出町運動広場発掘調査概報

発行 社団法人 和歌山県文化財研究会

印刷 邦上印刷